

『思女集』論

——もの思ふ女の独詠——

広岡曜子

(一) 三系統の家集と『思女集』

『思女集』は、ある「人」との別離を背景として、死を願うほどに思う「もの思ふ」心の内を独白形式で表現した、平安女流歌人相模の私家集であると言われている。^①

相模には三系統の家集があり、『私家集大成中古Ⅱ』の解題によれば、

- 一、流布本 浅野家本『相模集』
- 二、異本A 書陵部蔵『相模集』
- 三、異本B 書陵部蔵『思女集』
- 四、異本C 針切『相模集』

以上の四類のうち、「思女集」は流布本との共通歌のない「別集」^②で、また『思女集』と若干の内容の相違がある書陵部蔵『相模集』

は、『思女集』と同系統の家集と見られる。ただし、この二と三の伝本の違いは「伝承過程の変移のみではなく、もともと草稿本と整理本による異本関係」^③らしく、『思女集』のほうが書陵部蔵『相模集』よりも整理された家集であると考えられる。

『思女集』の成立については、流布本一九六番の歌の詞書に、
なにことにかあらむ、もの思女の集とて、おほえなきことよをも
書きいたして、これ見知りたらむ、残り書きそへてかならず見せ
よとて、人のをこせたりしかば

とあることから、『思女集』か、その元になった祖本『もの思女の集』かが、流布本より早い時期に書かれていたことがわかる。しかし、三系統の家集ともに未解明な点が多く、『思女集』がいつどんな目的で書かれたかは、家集そのものの研究のなかで考えるほかない状態である。

長文の自序を語り始める流布本は、雑纂形式でありながら、五九七首の歌で相模の一生涯を再構成していると思われる。なぜなら、流布本執筆の動機が「もし思いてむ人もしあらは、人しれすかたみともなれかし」という自己の生の軌跡を伝え残したい欲求に基づくものであったと、自序に記されているからである。天王子の歌・貴公子との贈答・宮仕え時の歌・紀行の歌・百首歌など、その生のひとこまを点描していく流布本の世界と『思女集』とはどのように違ふのだろうか。

『思女集』は、二八首中二六首が相模自身の独詠である。^④つまり、独詠の集と言ってよい。ではなぜ、多く贈答歌中心である女流私家集の類型をはずれて、独詠が繰り返されなければならなかったのか。これは、相模にとって『思女集』が何だったのか、という問いでもあろう。

また一方で、修子・祐子内親王主催の歌合や長元の賀陽院水閣歌合など、歌合歌人相模の公の場での華やかな活躍をかさね合わせたとき、『思女集』の世界をどう解釈することができるのだろうか。

この論考では、『思女集』を読む大きな手がかりとして「もの思ふ女」を中心に考察したいと思う。

(二) 「もの思ふ女」「思女」の意味

——不在の男への思い——

平安女流私家集中、作者の名以外の名称が付けられた家集は『思女集』だけであった。これは『伊勢集』『紫式部集』などの名称とは、相違するものである。

中世以降には、後嵯峨院大納言典侍の『秋夢集』が作者名以外の命名であるが、この名称は作者没後に縁故者によって付けられたものらしい。^⑤他に男性歌人の家集では、俊頼の『散木奇譚集』定家の『拾遺愚草』藤原師氏の『海人手古良集』など、作者の自負や謙遜の意味をこめた名称があるけれども、『思女集』の場合はどうか。『思女集』という特異な命名には、何らかの意味があるはずだと思われる。

『思女集』の最初の歌の詞書は次のようである。

人知れずもの思ふ事ありける女の、なげかしかりけるままに、思ひけることよ

この冒頭歌の詞書は、『思女集』をつらぬく主題を語る序文でもある、と言える。例として他の女流私家集の最初の歌の詞書をあげると、^⑥

まゝいり給てまたの日の御

『斉宮女御集』

よのいとはかなきころ、せさいのつゆをみて

(甲本) 『小大君集』

正月一日、ねのひにあたりたるに、雪のふりしかは

(甲本) 『伊勢大輔集』

てん上のよりゆみ侍りしとし、人に

『大式三位集』

など、いわゆる冒頭歌の説明の域を出ないものばかりである。

『思女集』序文の「もの思ふ事ありける女」と「思女」の意味上の

つながりは、流布本一九六番の歌の前掲した詞書から考え得る。

すなわち、流布本の詞書に『もの思女の集』という名称の家集が存

在していたことを、相模自身が記しているのである。当然相模は、

『もの思女の集』を認めていて、松崎以津子氏の説に従えば、^⑦「お

ほえなき」と言いながらも自分の家集であることを語ってしまっ

ていると言う。

従来、この『もの思女の集』と『思女集』は同一の家集と見られ

ていたが、また、『もの思女の集』は『思女集』の元になった本で、

『思女集』自体ではない、^⑧という説も橋本不美男氏らによって出さ

れている。成立にかかわる問題は、今どちらかに断定することがで

きない。しかしそれ以前に、「思女」という特異な漢語を現代の諸

注釈書で「もの思う女」や「もの思ひの女」と訳してあるのを見る

なら、『思女集』を『もの思女の集』と訓んでもよいのではないだ

ろうか。これが現代の訓み方にとどまらないのは、相模の生きた時

代より少し時代が下るけれども、『色葉字類抄』に、

ものをもふ 思 モノヲモフ

儼若―是也

とある。『色葉字類抄』によっても、「思」の漢字が「モノヲモ

フ」と訓まれ得ることを確かめられるのである。

このように見ていくと、『もの思女の集』と『思女集』は、たと

え二本が別の家集だったとしても、その家集名にこめられた意味は

まったく同じなのではないか。『思女集』の命名者は後人で、相模

ではない、とも考えられるが、どちらにせよ相模自身の記した『も

の思女の集』と同一の意味と見てさしつかえないはずである。

後藤祥子氏は、流布本で相模の繰り返す「もの思わしき」と「相

模の拠って立つ出生・生い立ちの足場のあやうさ」との関係指摘

されているが、^⑨『思女集』の「もの思ふ」はそれとは違う意味を持

っているのではないか。

少なくとも『思女集』には、相模の母前能登守慶滋保草女の源頼

光との結婚にともなう、頼光庇護下の人間たちとの複雑な関係は、

いっさい語られていないのである。たとえば相模を歌の師として歌を媒介に交流した受領集団「六人党」^④にも源頼光の子孫になる頼実と頼家がいるけれども、彼らとの交流も『思女集』を見る限りでは、何らわかりはしない。このことは、源頼光につながる源資通（相模との浮名を吹聴した人物）や大和宣旨（女友達として親交のあった人物）でも同様で、彼らとの人間関係は『後拾遺集』とか流布本から推測されることである。後藤氏の指摘は、このように、『思女集』と別に考えるべき問題なのだと思う。

『思女集』の場合、序文に記された「もの思ひ」と「女」は切り離しては読めない。後藤氏や広田収氏は「もの思わしき」「もの思ふ」を単独に扱って論じられているけれども、「もの思ふ女」「思女」は、ひとまとまりの表現として読まなければならないと思う。なぜなら、「もの思ふ人」「もの思ふ身」「もの思ふ我」は、次のように歌に多く見られる一般的な表現であるが、「もの思ふ女」という表現はどこにも見あたらないのである。

心あらば三度二度なく声を物思ふ人に聞せざらむ

『古今和歌六帖』・三八〇六^⑤

時雨ふる冬の木葉の変わらぬは物思ふ人の見れば也けり

『伊勢集』・一八五三

曇なく月はさりともし照すらむ物思ふ身の行末の秋

『拾玉集』・三三三

ぬぐ袖に頼へて今日は夏衣物思ふ身も変らましかば

『壬二集』・二六六

物思ふ我かはあやな秋の月尋ねて袖の露にすむらむ

『秋篠月清集』・二〇五

つまり、「もの思ふ女」が重要になってくるのである。「もの思ふ女」は、類型的な表現として解釈できない意味を持っているのではないか。

『佩文韻府』には、「女」のつく語としてたとえば「嫁女」「牛女」「智女」「列女」など多くの語がある。では、「思女」の意味は何であろうか。

平安朝初期に日本に伝来したと言われる『列子』では、次のように「思女」が「思士」の対になる語として用いられている。

思士不妻而感思女不夫而孕

(注) 有思幽国思士不妻思女不夫精氣潛感不仮交接而生子如鷓この「思女」と「思士」を『大漢和辞典』^⑥でも対語として扱って

おり、

思士^シ 思幽の国の男。妻無くして感ずるといふ。

思女^{シメ} 思幽の国の女。夫無くして孕むといふ。

とある。この「列子」引用部分は『列子』天瑞篇に載っている説話で、『中国古典文学大系4』で福永光司氏は「思いつめた男は妻がいなくても心ときめいて子が生まれ、思いつめた女は夫がいなくても妊娠する」と訳されている。内容的に『思女集』と『列子』を深く結びつけられないけれども、「思女」の対語が「思士(男)」であることは確かである。

また、同じく平安時代に『文選』と並んで貴族の必読書でもあった『玉台新詠』に、「青青河畔草」という数篇の漢詩がある。『玉台新詠』自体は、男女相思の恋情を主とした艶麗な漢詩を集めているけれども、「青青河畔草」の題でうたわれる詩は、たとえば

a 青青河畔草

青青河畔草 鬱鬱園中柳

盈盈楼上女 皎皎当窓牖^一

娥娥紅粉粧 織織出素手^一

昔為倡家女 今為蕩子婦^一

蕩子行不歸 空牀難獨守^一

のように、女が男と何らかの理由で別離しており、恋慕の情を女のがわから歌うものである。この詩では、男が何処かへ行ったまま

帰らず、女は空の寢床に独り寝するという、女の「怨愁^⑩」を思いうかべることができる。女は昔倡家の女だったのが、男と結ばれた今もその心は満たされていない。

そして「思女」がうたわれているのは、「青青河畔草」のうちの次の一篇である。

b 代青青河畔草^一

妻妾含露台 肃肃迎风館

思女御^一樞軒 哀心徹雲漢^一

端撫^一悲絃泣 独对^一明鏡歎

良人久徭役 耿介終昏旦^一

楚楚秋水歌 依依採菱彈

『新釈漢文大系60』で内田泉之助氏は「思女」を「もの思う女」と訳され、岩波文庫本『玉台新詠集』では鈴木虎雄氏が「もの思ひの女」と同様に訳されている。また鈴木氏は、「思女」すなわち「妻」をこの詩では意味すると注釈されている。

この詩で「思女」とは、遠くへ仕事に行って帰らぬ良人をひとり待ち続ける女のことであり、その女の心の思いを述べたものである。そしてこの詩の「思女」の「もの思ひ」とは、遠い良人への尽きない恋慕の情なのである。そしてまた「思女」の孤独感は「独对^一

明燈「歎」によって知られる。

このように「思女」とは、つねに「男」と密接にかかわる語で、「思」は男女の間柄に関する語らしいと言える。もともと中国文字の世界では、「思女」と言えば次の毛詩の

春日遲遲 采繁祁祁

女心傷悲 殆及公子同歸

(注) ……春女悲秋士悲

箋云春女感陽氣而思男秋士感陰氣而思女……

② をふまえているようである。これは毛詩の幽風ひんぷうの「七月」という

詩の一部分とその「注」で、①は「毛注」と呼ばれる毛詩の注、②は毛詩の箋である。①②の注ともに本文とひとつものとして読まれ、やはりここでも、「女」と「男」があきらかに対語となっている。

ただ、毛詩と前述の『列子』『玉台新詠』との相違点が二つあげられる。まず第一に、毛詩の季節は「春」だが、『列子』『玉台新詠』になると「春」という決まった季節から離れ、ひとつの季節にはとらわれていないことである。『玉台新詠』のbの詩では、「露」「雲漢」(天の河)「秋水歌」などの語から、むしろ季節は「秋」と見られる。『思女集』の季節が「秋」から「冬」への移行となっていることに注意しておきたい。

もうひとつの相違点は、詩の主題に関することである。毛詩では「春女」は「陽気に感じて男を思う」という意味でしかないが、『列子』『玉台新詠』では、あきらかに、離れている男を思う女、今ここに不在の会えぬ男を思う妻の意味が「思女」にこめられているのである。なぜなら、本文の一部をもう一度引用すると、『列子』では「不夫」と書かれ、『玉台新詠』のaの詩では「良人久徬役」と書かれ、bの詩では「蕩子行不歸」と書かれ、男が女のもとに不在である状態は一致している。この第二の相違点は「思女」の意味を知る上で重要だと思う。

では、『思女集』の「思女」はどうか。『思女集』の「思女」もまた、不在の男を思う女の意味で読めるのではないか。おそらくそこに、『思女集』ですべて「人」と記されるある男との恋と別離がかかわってくるはずである。「人」とは誰か、夫の大江公資、定頼、資通などの人物が推測されているけれども、臆化された「人」が誰であるかは容易にはわからない。それよりも、相模が不在の男に対してどんな思いを持って歌を詠んだかが、重要である。たとえば『思女集』十三番の歌の詞書に、

まことにやあらん、ものへなといひてみえぬ人を、はかなきいはほの中もたつねまほしう思なから、そたに心になふとよし思た

れぬほとに、をくれしと思かほなるなみたも、まつしる心ちすへし

とあるが、この詞書は、不在の男を「はかなきいはほ」^⑮の中まで追って行きたく思いつつそれさえできないで涙にくれる女の状態を語っている。男の「不在」が単に留守を指しているのではないことは、女の繰り返す男の夜離れへの嘆きから知られる。『思女集』十五番の歌、

まくらのちりのあるを

15 あはぬよのかすのみつもるしきたへのまくらのちりのたちあまつかな

は、ひとり寝の夜の女の恋情をうたっている。男の「不在」がもたらしたものは、「わが身ひとつ」「ひとりながめて」という孤独感であったが、男との精神的な齟齬を受けとめ、やまぬ思いを表現することが、相模にとつての独詠だったのではないだろうか。『思女集』の独詠の世界は、男との別離を契機に、男女の間の「思」を女の心内から語り、うたうものだと思う。そしてこの『思女集』をつらぬく主題は、すでに「思女」「もの思ふ女」という語によってあかさされているのであった。「もの思ふ女」という主題の提示のあと、『思女集』の歌から歌への流れは、ひとりの女の物語を展開していくのである。

⑮ 『和泉式部集』の「もの思ふ」と『和泉式部

日記』の「女」

『和泉式部集』には「もの思ふ」という表現が多く用いられている。たとえば次のような歌がある。

a 夕暮の思ひ

172^⑯ 夕暮になど物思ひのまさるらん待つ人のまた有る身ともなし

人の許に、わすれ草しのぶ草つつみて遣るとて

b 210 物思へばわれか人かの心にもこれとこれとぞしるく見えける

物思ひつゝくるに、いたふ悲しければ

c 709 なにごとも心にしめてしのぶるにいかで涙のまつ知にけん

おとこに忘られて侍けるころ、貴船にまいりてみたらし河に螢の飛び侍しを見て

d 1674 物思へば沢の螢も我身よりあくがれ出る魂かとぞみる

やすまさに忘られて侍しころ、かねふさの朝臣とひて侍りし

かば

e 1682 人知れずもの思ふことはならひにき花にわかれぬ春しなけれ

ば

a b は歌の内容から、d e は特に詞書の波線を付けた部分から、和泉式部の「もの思ふ」は、保昌をはじめとする男との別離にかか

わる表現であつたことが知られる。eの歌は特に、「わかれ」は世のならいと知りつつ、「わかれ」にまつわる「もの思ふ」が我身を離れないの歌っており、「別離」と「もの思ふ」との関係がはっきりと示されていると言えよう。『思女集』の最初の歌の詞書が「人知れずもの思ふ事ありける女の……」で始まっていることとeの歌の世界とは、無縁ではあるまい。また、「人知れずもの思ふ」と言え、次の貫之の

人知れず物思ふときは難波なる芦のそらねもせられやはする

『貫之集』第五・恋

を思いうかべたらしいことは、『和泉式部日記』中の贈答から推測されるが、この貫之の歌の「もの思ふ」も恋情であるの言うまでもないだろう。

相模が和泉式部の歌をつねに意識していたらしいのは、このふたりが、おば・めいの間柄で同じ家系に属するというだけでなく、実際に『思女集』の歌が和泉式部の歌を多く意識して詠まれていることからうかがえる。たとえば次の二首もそうである。

人の久しうおとせぬに

理やかつ忘れぬ我だにもあるかなきかに思ふ身なれば

和泉式部

あかつきにおきたるに、月のほのかにさししてよみゆるに

朝ぼらけ残れる月の影を見てあるかなきかの身をそよそふる

相模

しかし和泉式部の「もの思ふ」は、男女の間に苦悩する状態そのものをあらわす表現であって、一首の歌のなかでは、「もの思ふ」状態が前提としてあって、その心の状態から始発してある対象をとらえうたう。一方、流布本の相模の歌では、ほとんど、下句に「もの思ふ」があらわれ、「もの思ふ」状態は何らの解決を見ることがなく思考中止の形で投げ出されているようである。次の流布本一五番の歌でも、

ふるき人のふみをみて

なぐさむるかたもやあるとふみればもの思はしものしるべなりけり

「もの思ふ」状態に一層強くとらわれて行く。流布本の「もの思ふ」は前にふれたように『思女集』とは別に考えなければならぬ問題だが、それにしても、和泉式部の歌の表現方法とは相異なるものがあると言えよう。おそらく相模自身の複雑な内心を集約し、定着せんがための表現が「もの思ふ」だったと思われるが、今は流布本の問題として提起するにとどめておく。

では、相模が『思女集』の序文で自己を「もの思ふ事ありける女」

と呼んだのは何故か。女流私家集中、自分を「女」と呼んでいるものは『伊勢集』『本院侍従集』『中務集』があり、日記文学では『和泉式部日記』がある。これらは、いずれも歌物語的とか歌日記的と評される作品で、男との恋が、その男との贈答を軸に語られている。これらの作品の「女」は、

女はづかしと思ふほどに、この男のもとより人きたり、此女の家は

『伊勢集』

などきこえ給うて、御里はいづこぞとのたまひければ、女

『本院侍従集』

人にかはりて、ある女、おなじ少将に

『中務集』

女、いとびなき心ちすれど

つごもりの日、女

『和泉式部日記』

のように、歌の詞書の部分や日記の本文のなかに出てくる。作者が自分を「女」と表現するとき、それは何を意図しているのだろうか。

『全講和泉式部日記』で鈴木一雄氏は、

女主人公を単に「女」とのみ記す、先に述べた第三人称的叙述も、歌物語や歌物語的性格を持つ私家集などが好んで用いた書き方だ

ある。

と言われる。作者が自分を「女」と表現するのは、歌物語的な世界を意図することなのだろうか。これは、さかのばれば『伊勢物語』の「男」と「女」にまで論及しなければならない問題であろうが、今『思女集』の主題ということについて言えば、唐木順三氏の「男の愛の対象としての自分を、自ら対象化してとらえる視点の獲得^②」として「女」という表現を読むことができるのではないか。

相模は、

和歌好テ無益ノ事有リ。大江公資ハ大外記所望ノ者也。僉議之時、諸卿皆是レ拝任ノ宜シキ由ヲ言フ。而テ小野宮右大臣云ク。相模ヲ懐抱シテ秀歌ヲ案ズルノ間、公事闕如カ云々。諸卿頗ヲ解ク。

此ニ依テ空ク拝任セズト云々。相模ヲ以テ妻ト為スノ此也。

『袋草紙』上巻

と『袋草紙』が一種の揶揄とも皮肉ともつかない言い方で書きとめた、優秀な歌合歌人であり、夫大江公資との一対は、注目の的であったらしい。しかし相模は、そのような華やかな公の場での歌とはまったく別の次元で、自己をみつめる必要にかられていた。それは、前章で述べた男との恋と別離を契機としての自己の内側からの欲求であっただろう。そして、「もの思ふ事ありける女」と記すことによって私の場に立ち戻った作者が、閉ざされた想念を書き始め

るのではないだろうか。一生を回顧する流布本の自序で、自己を「われ」と記すのは、すでに流布本と『思女集』の相違をはっきりと語っているのである。

私の場に立ち戻った作者は、『思女集』の終りにこう書いている。うきことのみありふるまゝに、まさるよなるなれば、くおもひはなればやと思へと、あやにくになかきいのちはつらくも

28ふかくのみおもひいれともしての山なとこえかたきわかみなるらん

人はなにも見ましき事ともなれと、心のうちにこめたりしことゝもなれば、かくあやしきなりとそ^㉔

自分の恋と別離の「もの思ひ」は、ありふれたことかも知れない。しかしそれを書いてみると、こんなに「あやしき」ものとなつてしまった。「あやし」とは、自分で自分の心が理解できぬ場合に用いられる自己反省の語だと言ふ。「女」としての自分を独詠の反芻によつて凝視して行つたとき、書かれた世界は「あやしき」と表現されなければならぬほど、我身の認識へと帰ってくるものであつたらう。『思女集』跋文の「あやし」とは、書けば書くほど少しずつ見えてくる自己の内側の不可解さであり、男とつながる世界とは別の、文書くわざにのめりこむ自己の発見ではなかつただらうか。『思女集』二八首中、「身」という語は七度も繰り返されているけれども、

相模の我身への認識は「みづからだにもいとほしき身」から「わが身ひとつ」の孤独感へ、更には「あるかなきかの身」という存在感のつたなさへと及んでゐる。相模の歌は「感動を沈潜させてそれを具象化し、技巧的で細緻な歌^㉕」であるというように言われるが、『思女集』の歌は、むしろ生々しい「女」の身をうたつてゐるのである。

前掲の『思女集』二八番の歌にしても、安田章生氏の「憂きことばかりが生きていくにつれて多くなるこの世なので、苦しいと思ひ早く死にたいと思ふのだが、あいにく寿命があつてそのことがつらいことだ。早く死にたいと思ふのにどうして死なないわが身なのだらう^㉖」という単なる死への憧憬とは思われない。「苦を思い離れたるの苦悩を思い離れたいができない、という意味ではないかと思ふ。その苦悩とは、述べてきた『思女集』の「もの思ひ」そのものを指していたはずである。そして、いくら願つても我身をなくすることができないと嘆く現世からの離脱の願望と現世への執着との背反のなかで生きるほかない自己の屈折は、たとえば和泉式部の、世の中にあやしきことはいとふ身のあらじと思ふに惜なりけり

と通じていくものであらう。すなわち二八番の歌は、『思女集』に記してきた女の「もの思ひ」が離れない自己を、現世からの離脱

の不可能さという形で認識したものである。

後藤祥子氏が言われる相模の「文書くわぎへの執着」とは、おそらくこの『思女集』の自己凝視を経て、ふたたび公の場に戻った相模の数々の歌合に残した多量の歌に見ることができであろう。また、森本元子氏が相模の歌を「和歌というものが女性にとって多く生活的であった過去の時代に対し、芸術的に根をひろげてゆく新しい方向を示す」と言われたが、述べてきたように、むしろ相模の歌は『思女集』に見る限りでは、もっとも私的な、「女」の歌の系譜に位置付けられるものであった。王朝和歌の屈折点となった後拾遺時代に、その表現のあり方は異なっていたが、和泉式部と相模というふたりの女流歌人が、女の「もの思ひ」をみつめていたのである。

「歌物語」的と言われることについてや、各歌の解釈にまで、この論でふれることができなかった。後日、それらの残された問題について考えをまとめたと思う。

① 松崎以津子氏「相模集の研究——別本相模集と思女集——」『国文』昭39・7。

② 関根慶子氏『私家集の研究』第三章第二節「別集と異本」。

③ 注①に同じ。

④ 「それごとといひつる人より」の詞書のある七番の歌と、和泉式部の歌である二五番をのぞく二六首。

⑤ 『桂宮本叢書』第十卷「秋夢集」の解題による。

⑥ 『本院侍従集』『伊勢集』『賀茂女集』などの家集の、序文的な冒頭文が一方で存在することも、注意すべきである。

⑦ 注①に同じ。

⑧ 稲賀敬二氏「相模」『国文学』昭34・4をはじめとする諸説。

⑨ 橋本不美男氏「桂宮本叢書」第九卷「相模集」の解題と注①の松崎氏の説。

⑩ 内田泉之助注釈『玉台新詠』上巻（『新釈漢文大系60』）。

⑪ 鈴木虎雄氏『玉台新詠集』（岩波文庫本）。

⑫ 峯岸明・中田祝夫編『色葉字類抄 研究並びに索引 本文索引編』。

⑬ 後藤祥子氏「相模」『国文学』昭54・3臨時増刊号。

⑭ 「六人党」についてはたとえは久松潜一他『日本文学史 改定新版 中古』に「集団的な自己主張を意図する自発的な結集」であると説明されている。

⑮ 広田収氏「平安中期女流私家集の共通項——私的世界の対象化と認識——」『同志社国文学』第15号。

⑯ 数字は『国歌大観』の番号を示す。

⑰ 諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店）。

⑱ 注⑩に同じ。

⑲ 「はかなきいはほの中」の「いはほの中」とは、『岩波古語辞典』によれば「俗世間をはなれた住みにくい所」と言う。

『和泉式部日記』に「心うき身なれば宿世に委せてあらんと思ふにもこの宮仕へよ。今更に本意にもあらず、いはほの中こそ住まほしけれ。又うきこともあらばいかがせん」とある。

⑳ 数字は清水文雄校訂『和泉式部歌集』（岩波文庫本）の番号を示す。

㉑ 米沢勝代氏「相模集の一考察」『女子大国文』49号。

⑳ たとえば伊井春樹氏「本院侍従の宮仕えについて」『平安文学研究』昭41・6では、『本院侍従集』を「私家集的歌物語」と呼んでいる。その理由のひとつに、人物の実名は記さず臚化表現をとっている点をあげていることは、『思女集』でも考えるべき問題である。

㉑ 唐木順三氏『無常』。

㉒ 『思女集』二八番の歌。

㉓ 岩波日本古典文学大系『和泉式部日記』の頭注。

㉔ 上野理氏「相模」『平安朝文学辞典』所収。

㉕ 安田章生氏「相模」『王朝の歌人たち』。

㉖ 森本元子氏「私家集とその歌人——後拾遺・金葉時代——」『国文学』昭40・3。

*なお、『思女集』のテキストには『桂宮本叢書』を、流布本『相模集』のテキストには『私家集大成中古』Ⅱを使用した。